

# ワーグナーの伝記 二冊

## 巨匠の詩と真実

2022/09/27



painting by Franz von Lenbach, 1882, Bayreuth,

いま手元に、リヒャルト・ワーグナーの注目すべき伝記が2冊あります。ワーグナー自身が書いた自伝を山田ゆりさんが翻訳なさった『わが生涯』（1986年10月25日発行）と渡辺護先生の著書『リヒャルト・ワーグナー——激動の生涯一』（1987年3月20日発行）です。

## 『わが生涯』 リヒャルト・ワーグナー著。山田ゆり訳。勁草書房。

先ず『わが生涯』ですが、これは大変な大著で、邦訳本の本文だけで910頁もある、とても厚いものです。この自伝は、バイエルン国王ルートヴィッヒの要請により、1865年(52歳)から1870年にわたってワーグナーが、当時まだフォン＝ビュローの妻であったコージマに口述筆記させたものです。全部で4部(3巻)からなり、1813年(生年)から1864年までの出来事が述べられています。各巻は順を追って限定私家版としてスイスのバーゼルで印刷され、ごく限られた友人にだけ贈られました。国王には、1880年にその増補版を贈っています。広く公開出版されたのは、ワーグナーの死後28年たった1911年、ミュンヘンの書店からでしたが、私の手元にも学生のころ東京の古書店で求めたこの3巻本がありますように、かなり広く流布した話題の書であったようです。

もちろん、本人の自伝ですからワーグナーの第一級資料には違いないのですが、すべてが真実とは限りません。日付の思い違いや出版時での誤植や読みちがいは当然あるとしても、重要なことでありながらわざと触れなかったり、嘘をついたりもしていますので、どうしても「本文批判」(テキスト・クリティーク)と「アリバイ調べ」が必要になってきます。そのため、後世の学者の手によって本人の作為やコージマの捏造(ねつぞう)などが遠慮なく暴かれていくことになります。その結果、なぜ、彼ら(ワーグナーとコージマ)が嘘を言い、また、嘘偽の事実を捏造しなければならなかったかはっきりしてきて、そこに二人が生きていく上での真実がより鮮明に見えてくることになりました。特にこの訳の底本ともなったマルティン・グレゴール＝デリンの綿密な研究はそういった意味で画期的なものとして、現在、最大級の評価が与えられています。

この山田訳には、グレゴール＝デリンの詳しい注と後記も付されています。さらに、1864年から68年まではワーグナーが書いた「年代期」が、1869年から1883年(没年)まではグレゴール＝デリンが作成した「年代表」が加えられていて、『わが生涯』の続編のかたちになっていますので、ワーグナーの一生が丸ごとたどれることになりました。それが、この訳本の大きな特色であり、重要な価値だと思われまます。

巻末に「訳者(山田ゆり)遺族あとがき」が添えられています。この持ち重りのする大部の書を手にしてしまうと、病魔に冒されながらも、人生の最後の3年間をこの膨大な書を訳すことに捧げた山田ゆりさん(1982年没)の偉大さが偲ばれます。それも、ワーグナー独特の繁縷(はんじょく)で術学的(げんがくてき)で持って回った表現が多く、今まで誰もが邦訳を試みては成功しなかった「幻の書」であればなおさらその思いは強いのです。



## Pierre-Auguste Renoir

### 『リヒャルト・ワーグナー激動の生涯』渡辺護著。音楽之友社。

先ず、渡辺先生からこのご本をお贈りいただいたときの「献呈の言葉」の一部をご紹介しますおきましょう。

「拙著がようやく刊行のはこびになりましたので、一部お送り申し上げます。御多用中の折からこのような大部の本を全部読んでいただきたい、などとは申しません。御興味のありそうな章をお選びいただいてお読み下さればありがたく存じます。

例えば次の諸章などは面白いかと存じます。

第2部第5章（1839年）、第3部第8章・第9章（1849年）、第4部第2章（1850年前半）・第11章（1858年前半）、第5部第1章（1858年後半）・第2章（1859年後半）、第6部第1章（1864年）・第3章（1865年後半）、第8部第2章（1881年）・第3章・第

#### 4章（1882年）・第5章（1883年）

私としては、特にはしがきと『ヴェネツィアに死す』（1883年）とは是非読んでいただきたいと思って居ります。」

その「はしがき」には、この伝記をどんな立場から、また、どんな方法で書いたかが記されています。想像や推理による描写は一切避けてノン・フィクション風に客観的に述べたこと、ワーグナーの生涯を時代の経過通りに叙述したこと、最新のワーグナー研究の成果のみを記したこと、ワーグナーを単純化しないために、彼が体験した小さな旅行や恋愛や友人とのいさかいなども省略せずに書いたこと、などです。

ところで、私たちがワーグナーの評伝を読んでいつも思うのは、それを書く人のワーグナーへの思い入れの程度や立場によって、描かれるワーグナー像がまちまちで、英雄・天才から佞臣・山師まで評価が正反対に分かれることです。特に気になるのは、ワーグナーをわざわざ矮小(わいしょう)化して、すべての行為や感情を小市民のそれに合わせるような、志の低い人の勘繰りとしか思えない解釈が後を絶たないことです。読み進むにつれて段々と気が重くなっていくときが少なくありません。著者はこのことを良くご存知なのでしょう、そのために「想像や推理」を避け、「省略」を拒んだものと思われま

さて、渡辺先生が面白いとなさったこれらの章は、どうやらワーグナーの生涯の中でも特に問題の多い年であるようです。あなたがワーグナー・ファンならば、この年号を見て、ハハ〜ンとお思いになったことでしょう。ワーグナーは、1813年、ドイツのリップチヒに生まれ、1883年ヴェネツィア（ベニス）で亡くなりましたが、その間における以上の年代は特別な事件があった年であり、それについての著者の新説が述べられている箇所です。本での章題もご紹介しながら、出来事を簡単に述べて見ましょう。

**1839年「パリへの逃避行」** 美人女優のミンナと結婚したのですが、自作をパリで上演するために彼女と愛犬と大切なシャンデリアまで持って、無謀な国外逃亡を企てます。

**1849年「(その1) バリケードを死守せよ」** ドレスデンの宮廷楽長の身でありながら革命に参加し、ドイツからの亡命をよぎなくされます。無政府主義者バクーニンとの出会いもありましょうが、ワーグナーは本来的に革命主義者であったのでしょ

**1849年「(その2) 逮捕状に追われて」** ドレスデンを命からがら逃げだし、九死に一生を得ます。「事実は小説よりも奇なりという。ワーグナーがその夜に出会った偶然は、まるで小説のように驚くべきものである」と言われるほど、彼の運の強さをよく示しています。

**1850年前半「たまゆらの恋」** ボルドーの若きワイン商ウジェーヌ・ローソの妻ジェシーとの激しくも苦い恋物語です。この経験が「ワルキューレ」の愛の二重唱を書かせたと言われています。

**1858年前半「チューリヒ最後の年」** 人妻マチルデ・ヴェーゼンドンクとの別れです。「ワーグナーにとっては、二人が別れてからのちも、マチルデ

はただひとりの心の女性であった」。ここでは、「一体マチルデはどの程度ワーグナーを愛していたのであろうか」がテーマになっています。

**1858年後半「カナル・グランデのほとりで」** 一人でチューリヒからヴェネツィアへと逃げてきたワーグナーは、ヴェネツィアの大運河（カナル・グランデ）に面した家を借ります。いよいよ「トリスタン」の作曲に取りかかるのです。

**1859年後半「ルツェルン、そしてパリ」** 戦禍のヴェネツィアを後に、スイスのルツェルンへ逃げていきます。そこで世紀の大作「トリスタン」が完成されました。

**1864年「奇跡は現実となった……」** 苦境のどん底にあったワーグナーのもとに奇跡が訪れます。ルートヴィヒ2世からの使いがついには彼を見つけたのです。

**1865年後半「ミュンヘンからの追放」** さまざまなスキャンダルのために、王のもとから追われます。政治と芸術、常識とスキャンダル、など多くの問題が提出されます。

**1881年「ユダヤ人たちとともにユダヤの酒を！」** 「パルジファル」の初演を指揮することになっていたヘルマン・レヴィとワーグナーとの間に生じた誤解は、何だったのでしょうか。

**1882年前半「ルノアールとの会見、そして『パルジファル』の初演」** ルノアールの描いた肖像画を見てワーグナーは言いました、「ああ、ああ、私はプロテスタントの牧師みたいに見えますね」と。

**1882年後半「『死神の襲撃を防ごうとするかのように』** ワーグナーはしばしば心臓発作におそわれるようになります。

**1883年「ヴェネツィアに死す」** そしてついに死がやってきます。コージマはワーグナーの遺体を抱いたまま、25時間動くことなく過ごすのでした。

この他にも興味深い見解がたくさんあります。

例えば、ワーグナーの出生の秘密についての詳しい考察が述べられている第1部第2章「父親は誰なのか？」です。まるで、著者が探偵となって未解決な謎に挑む、上質な推理小説を読むような興奮を覚えます。そういえば、ワーグナーには謎が多すぎますが、その一つひとつに対して、著者は確実な証拠を上げながら独自の推理を述べています。言ってみれば、『アマデウス』の（正確な学問の裏付けのある）『ワーグナー版』と言ったところでしょうか。

また、バイロイトのあの独創的な舞台構造が、彼の生涯におよぶ劇場経験の集大成であったことも良く分ります。彼がいよいよ指揮をしていたリガという片田舎にある「穀倉」という名の古い陰気な劇場の特異な構造とか、パリ・オペラ座のステージの横で待たされているときに聴いたオーケストラの柔

かな音の秘密とか、そういったとても偶然としか思えないような経験の破片からあの祝祭劇場は出来上がっているのです。

当時の有名な音楽家とのエピソードにもこと欠きません。ワグネルアーナとしてのブラームスのこと（第5部第5章）やブルックナーの愉快なお話（第7部第2章「あのおそろしきビールの子供のせいなのです」）や熱狂的なワグナー・ファンの作曲家ヴォルフのこと（同第4章「少年の名はフーゴー・ヴォルフ」）などです。

ときには筆が滑り、例えば、ワグナーがドイツ帝国の現状の繁栄がいかに表面的であるかを述べた箇所では、「まるでどこかの国の現状を述べているような言葉ではある」といったコメントを見つけると嬉しくなります。

この書を読んで最も興奮させられるのは、ワグナーがあらゆる困難を乗り越えて『指輪』4部作を完成し、そのための劇場であるバイロイト祝祭劇場を建てるにいたる艱難(かんなん)辛苦の物語です。『わが生涯』では、ワグナーがルートヴィヒ2世の秘書の訪問を受けるところまでしか書かれていませんのでなおさらなのですが、彼の運の強さと「必ず成功するのだ」という不屈の精神には改めて驚かざるを得ません。

この本で見付けた私の好きなジョークをひとつ最後にご紹介して、今回のお話をおしまいにいたしましょう。ワグナーがウィーン・フィルを指揮した時（1872年）のこと、ホルン奏者のリヒャルト・レヴィがトチったのを前列に座って聴いていた喜劇作家のエドアルト・マウトナーが笑った。後で、ワグナーがマウトナーにその無礼を責めると、側にいたレヴィも彼に一言、「私はあなたの喜劇の上演を見たことがあるが、そのとき一度だって笑ったことはありませんでしたよ！」。

【都築正道】